

## 特別展「日本の古窯」によせて

館長 友野 澄雄

岡山県立博物館では、「日本の古窯」をテーマに昭和61年度の特別展を10月25日から11月24日までの1か月間、開催することにいたしました。

中世の窯業は、かつては、「中世六古窯」と人口に膾炙（かいしゃ）されていました。しかし、近年、考古学的発掘調査が進み、中世においても窯業は全国的に行われていたことがはっきりしてきました。

それらは、古代からうけついだもの、中世に新しく興ったもの、桃山時代に至って勢いついたもの等、種々さまざまであろうと思います。土をねり、形をつくり、そして焼き固めて作られたものは、人々の生活必需品であったと想像されます。このことは今も変わりはないと思います。しかし今は、焼物を美の対象ともしています。その美を競いぬコンクール、展覧会があります。

人々は焼物をいつのころから美の対象としてみるようになったのでしょうか。

第2次世界大戦後のわが国の国民生活を振り返ってみても、戦後まもない食にさえ事欠くころの人々の関心は、食料をはじめとする生活必需品にあったのです。それが、経済が復興し、発展し、国民生活が向上し、生活にゆとりができるころから、人々の関心は多方面に広がっていきました。そして、焼物へも目が向けられるようになったのです。歴史の上においても、このような状況はあったのではないかと思います。

中世の窯業の主流は、壺・甕・播鉢の三種の生産にあったと思います。いわば生活必需品の生産が中心であったのです。それが桃山時代になると様相が変わってくるようです。

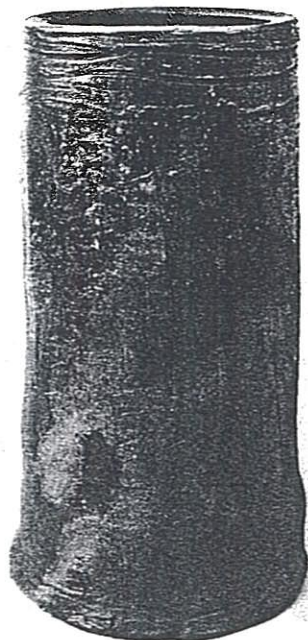
生活にゆとりのある人々によって、茶の湯が流行し、それに伴い、形のよいものは茶道具として利用されるのです。茶人といわれる人たちは、特定の窯に特別に注文して茶道具を作ってもらうようになったと思います。それらは珍重され、大切に保管されて現在に伝わり、現代人も貴重品として扱っているのです。

今回の展覧会では中世12の古窯、すなわち、瀬美・常滑・瀬戸・美濃・珠洲・加賀・越前・信楽・伊賀・丹波・備前・亀山の各窯で焼かれた、生活必需品として壺・甕・播鉢や

喫茶用具、宗教用具など約200点を展示いたします。この中には、国指定の重要文化財、それぞれの県・市の指定する重要文化財も多数含まれています。年代的には、平安時代末期から桃山時代まで、すなわち12世紀から17世紀のはじめまでに作られたものです。それぞれの焼物はそれぞれの地域の特色を具現しています。

岡山県には古くから備前焼があり、今日まで連綿と続いています。その備前焼の中世の姿を全国比較の中でみていただきたいと思います。

おわりになりましたが、今回の展覧会への出品を心よく御承諾くださいました所蔵者の方々をはじめ御協力を賜りました皆様に心からお礼を申し上げます。



重文 備前筒大花生 室町末期 個人蔵

昭和61年度特別展

# 「日本の古窯」

10.25～11.24

日本の焼物は世界でも類を見ないほど多様で、その芸術性も「わび」から繊細な色ものまで、高度に洗練され、人々の生活に溶け込んで今日に至っている。

岡山県には、古代に源流をもち、今日まで連続とつづく備前焼がある。備前焼は日本の焼物が成長発達する過程の中で、あたかも生き証人のようにずっとかかわっている中心的焼物といえよう。そのことは線だけでなく面的にもまたいえるのである。

今日、全国各地で進んでいる中世遺跡の発掘にともない客観的に解明されることによって、備前焼の足跡や力の実像が裏付けされるところとなった。例えば、備前焼が何時頃から、どのようなルートで、どのような地方へ、どんな器種が、いかなる規模や手段で送り出されていったかというような流通の問題もその一つである。

しかし、備前焼だけに目を向けていたのでは、いくらそれが生き証人といえども、地方色の豊かな中世では、全国各時代の焼物と生活文化を推しはかることはできない。どの地方の焼物にしても、その土地の人々の日常生活という行為の中で直接間接にかかわっている。焼物自体が人の行為によって生み出されたものである以上、人の生活の基盤である自然条件や社会条件を映しているため、その結び



重民 常滑自然釉三耳壺 平安末～鎌倉期

常滑市立陶芸研究所蔵

つき方は千態万様であるが、人の社会活動の中で絶え間なく変化しているのが普通である。変化の激しいもの、変化の緩慢なもの、異種のものや接触反応するもの、独自性を守るものなどがあることはいうまでもない。いずれにせよ、人と焼物相互の関係は人の生活・行動の中で行われ変化し続けていることは確かである。そのような観点から日本の古窯を見てみたい。そうすることによって、日本の中世という時代状況、中世のそれぞれの地域の文化、全国の焼物の動き、経済の動きが理解しやすくなるのではないだろうか。それによって日本全体の焼物と、岡山県の備前焼がどのような併存関係を持っているかとか、あるいはまたそれぞれの古窯がどういう方向性や美的表現を含めた特質をどのように持っていたか、まで知ることが出来れば、時代や生活と人々の関係を理解できるのではなかろうか。

今回の特別展は、平安時代末から桃山時代に至る過程に足跡をとどめた代表的な12古窯、すなわち瀬美・常滑・瀬戸・美濃・珠洲・加賀・越前・信楽・伊賀・丹波・備前・亀山（まだ、その創成、発展、消滅のあまり知られていない、岡山県の須恵器系の古窯で、変化テンポの極めて緩慢であった亀山焼にも光を当てて、その特徴を探り、強豪・備前焼の膝元での生きる姿をみとめることにする。）の代表的焼物を一堂に展観し、それぞれの古窯の軌跡や特質を、比較の中でみていこうとするものである。

これまで、全国的にみて、余りにも強大な備前焼が存在した岡山県では、他地域の古窯に対する関心は必ずしも高いとはいえなかった。そうしたこともあって、西日本では日本の代表的古窯を一堂に展観したことはなかった。中世古窯は12古窯の他に、地方の小さいものを含めると、現在全国で40を越える産地が確認されている。

それらは前述のように地域に根ざし、独自性を保ち



重文 瀬戸黄釉巴文壺 南北朝期

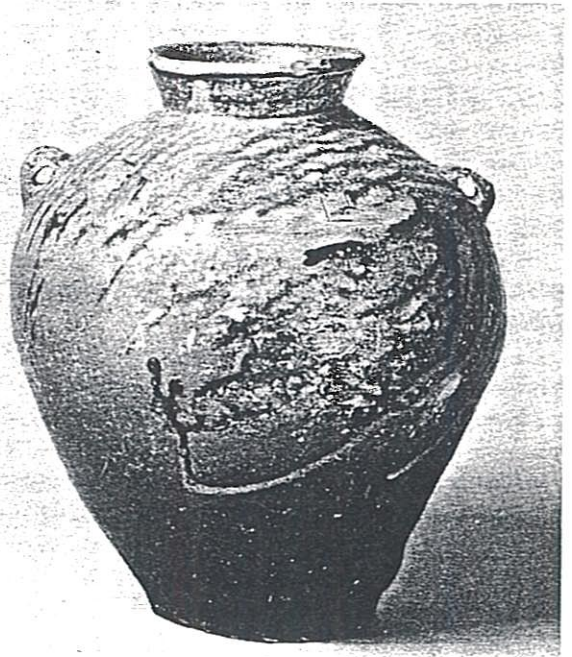
梅沢記念館蔵



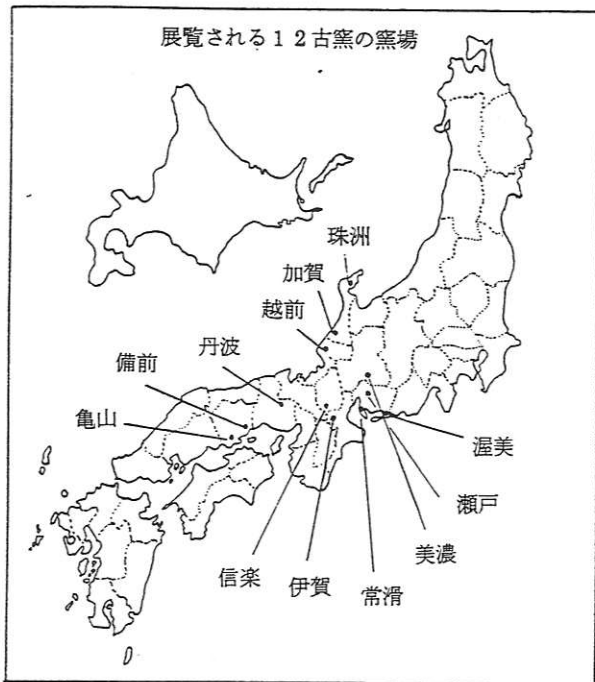
ながらも、諸々の社会条件の中で、お互いに影響しあい、時には競合し、それぞれの方向性やバラエティーに富んだ消長のドラマを演じてきた。その活動エネルギーこそが、日本の焼物のレベルをここまで引き上げる源であったと思う。そのように大きく花開いた日本の古窯の発達の鍵を握っている中世の焼物は、武家社会の中で、人々の生活を物質的に豊かにし、またそれぞれ独自のあたたかさや力強く野趣に富んだ美をかもしだしてきた。

その美しさは確かに今日の我々が感じるもので、当時の人々には無縁のものであったかも知れない。しかし、その美しさが当時作られているから、次の時代に感動を与えることができ、またそれを足場に発見や改良が生まれていったのも事実である。武骨で、野趣に溢れた中世の焼物の美は、ある意味では、わびやさびの源流でもある。日本人の美意識の本質とされるものの形成発展に中世の焼物が大きくかかわっていることを、そこにみる事ができる。今回の展示会はそうした美と流れの展示でもある。

この各窯の美と流れの展示はとりもなおさず、備前焼とその秘められた歴史を改めて認識する上で、また日本の中世とその文化、人々の生活を知るため、そして現代をみつめ、理解する手掛りになると思っている。



越前双耳壺 室町初期 福井県陶芸館蔵



信楽檜垣文壺 室町期 伊賀信楽古陶館蔵

岡山県では、古墳時代の須恵器の登場も5世紀中頃からすでに認められ、さらに飛鳥、白鳳時代にはそのような須恵器からいち早く脱却し、白地に深緑色の自然釉を映えさせた、寒風須恵器（猿投窯でいう白瓷という表現が岡山県にはないので、単に須恵器としか呼ばれていないが、技術的には、明らかに古墳時代の須恵器とは発展段階の異なるもので、いわゆる「白瓷」に決して劣るものではない）を量産した。

その後どういふわけか、平安、鎌倉時代にはさしたる特徴のない停滞期（他の古窯、例えば渥美、瀬戸、常滑等の東海諸窯に比較して）を迎える。

そして再び、室町時代になると当時隆盛を誇っていた常滑焼を西日本から駆逐し、強大な勢力を蓄え、やがてそのまま茶の湯と遭遇することによって一段と飛躍することになる。

桃山時代に至っては、わび、さびをさらに美術的に完成させるべく、表情を高め、最高度にのぼりつめた備前焼の美。これも日本人の美意識の形成に深くかかわっているといえよう。あらゆるものが効率と量産で象徴される今日の近代化されたシステムと管理の社会の中で、ものと人との人間関係、あるいは人間的な美しさとは何かが問い直されている時代に、原点に立ち戻ることは無意味ではない。



丹波自然釉壺 室町末期 丹波古陶館蔵

## 主な出品物

(重文：重要文化財、重民：重要有形民俗文化財)  
(県文：県指定重要文化財、市文：市指定重要文化財)

(名称)	(所蔵者)
渥美経筒外容器	東京国立博物館
重文 渥美葦鶯文三耳壺	愛知県陶磁資料館
渥美頭長銘壺	田原町教育委員会
重文 瀬戸黄釉牡丹唐草文広口壺	愛知県陶磁資料館
重文 瀬戸灰釉巴文広口壺	梅沢記念館
織部手桶茶入	愛知県陶磁資料館
猿投牡丹文経筒外容器	〃
重民 常滑猫かき文自然釉大甕	常滑市立陶芸研究所
常滑長頸壺	個人
重民 常滑自然釉三耳壺	常滑市立陶芸研究所
越前三筋壺	福井県陶芸館
重文 越前甕	兵庫県陶芸館
越前片口小壺	水野古陶館
加賀甕	小松市立博物館
加賀幾何文壺	〃
加賀作見窯瓶子	〃
珠洲娑婆文壺	本多コレクション
県文 珠洲秋草文壺	石川県立歴史博物館
県文 珠洲樹下鳥禽文壺	〃
信楽広口大壺	信楽伝統産業会館
信楽播鉢	滋賀県立窯業試験場
市文 信楽繪垣文壺	伊賀信楽古陶館
県文 伊賀片口小壺	仏土寺
重文 伊賀耳付水指(銘「破袋」)	五島美術館
伊賀矢筈水指	上野城
県文 丹波反口自然釉桐文壺	兵庫県陶芸館
丹波康永年銘壺	MOA美術館
重文 丹波秋草文四耳壺	梅沢記念館
丹波自然釉大皿	丹波古陶館
寒風自然釉大壺	備前長船博物館
市文 備前四耳壺	個人
重文 備前筒大花生	個人
備前三角水指	林原美術館
亀山壺	神前神社
亀山壺	芳井町立郷土資料館

岡山県立博物館だより No27

発行日 昭和61年10月1日

発行者 岡山県立博物館

館長 友野澄雄

岡山市後楽園1-5

☎(岡山) 72-1149